

**\* 驚くべき神のことば**

私たちは、救い主イエス・キリストが誕生したことを知っているのですが、毎年毎年クリスマス喜んで迎える準備をしている。ところが、当時のマリアにとってはどうだろうか？この時、マリアは14～15歳ではないか、と言われている。いきなり、「おめでとう、恵まれた方」と言われても、戸惑うばかりであっただろう。当時、まだ結婚していないのに「身籠る」ならば、石打ちの刑に処せられることであっただろう。この受胎告知は、マリアにとっては、命の危険を伴う、ある意味、災いのようなものではないだろうか。単純に喜べることではない。

御使いガブリエルは、そんなマリアの不安や恐れに対して、はっきりと答えている。身籠った子は、聖霊によって産まれる聖なる神の子なのだ、と言うのである。そして、御使いは「神にとって不可能なことは何もありません。」と宣言する。

**\* マリアの信仰告白**

ガブリエルが伝える神様の約束、しかも、不動の確かさを持って語られる神の約束に対して、マリアはどのように応答したのだろうか？38節「マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」・・・」これは10代の女子が、幼子のように素直に、主に信頼したように見える。しかし、「私は主のはしためです」と自分の立場をわきまえていることに注目したい。これは、言い換えれば、「私は主の女奴隷です」と告白することだ。奴隷は主人の所有物であるから、主人に使われる、利用されるのである。マリアの従順さは、いやいやながら、不本意で従うものではなく、このお方なら、自分の人生を委ねても決して惜しくない、むしろ喜んでこの身をお捧げしたいという献身の現われなのだ。

**\* 主の御前における私たちの立場**

マリアは、歴史上ただ一人、聖霊によって産まれる神の御子を、胎内に宿すという役割を果たした。私たちはどうだろうか。聖霊によって産まれた主イエス・キリストは、信仰を明らかにした私たちキリスト者にもう一人の助け主（すなわち聖霊）を送って下さり、私たちは聖霊が宿るこの身となった。第一コリント6章19-20節を読むと、私たちの体は「聖霊が宿る器」であり、「聖霊の宮」である。私の体は自分自身のものではない、主のものであることを自覚しよう。